

はしがき

グローバルな金融・経済危機と、オバマ大統領の核廃絶プラハ演説（二〇〇九年四月）に象徴される希望とが交錯するなかで、この書はつくられた。世界をどう把握し、現在をどう生きていくか。平和学を学ぶことで、私たちのこれからが大きく変わる。

平和学を学ぶのに特別な準備はいらない。予備知識もとくに要求されない。共感に基づいた他者への関心——おそらくこれがいちばん必要なことだ。

アクションリサーチという企てが近年NGO関係者などのあいだにひろがっている。具体的な現場に出て、問題解決に取り組む当事者たちと手問ひまかけて関わるなかから学習していく手法だ。

現場でのエクスポージャー（本書第2章参照）体験をとおして社会の現実を目をひらく。先入観や偏見を洗いなおす。お互いの関係性をとらえる。関心をもちつけ、顔の見える交流をかさねる。問題の背景や構造の把握を試みる。こうしたコミットメント（自己投入）をとおし、手応えのある世界理解を自分のものとして獲得する。グローバリゼーションや開発主義を相対化する批判的視点をもつ。「平和学の現在」にはこうしたことが欠かせない。

世の中には大づかみにして四通りの人たちがいるようだ。

①だいたい今のままで満足だから世の中をあまり変えたくない人。②自分にとってもつと都合のよい方向へ世の中を変えていきたい人。③不利な立場におかれた人たちのために世の中を変えてい

きたい人。④世の中なんか変えられそうもないと諦めている人。

あなたはいつたのタイプのだろうか…。

じつのところ、コトはそう簡単ではない。ひとりの人間の中にこれらの要素が複雑に入り交じって存在しているのが、むしろ普通といえるからだ。

私たちが生きるこの世の中には人びとを苦しめるさまざまな難問が存在する。しかもそれらの多くがいまや相互にからまりあつて地球的問題につらなり、部分的解決さえ容易ではない。それがグローバルゼーションの実態だ。二〇〇八年末、日本では米国発のグローバル金融・経済危機のあおりで大量の派遣労働者が切り捨てられ、野宿生活に追い込まれる人も少なくなかった。グローバル化は不可避のプロセスなんだと無力感におそわれて諦めたり、自分（の組織）だけ何とかうまく立ち回ろうと画策する人のなんと多いことか。グローバル危機の原因と批判される強欲資本主義も、私たちに内在するような傾向が生み、巨大化を許してしまったのではないか。

たとえばゴミ問題。便利な生活のツケが大量のプラスチックゴミを生み、捨て場はどこももう限界だ。焼却してもダイオキシン汚染が私たちを襲う。環境ホルモンとしてダイオキシン類などが作用するとき、従来の毒物濃度の一〇〇万分の一程度というごく微量でも未来世代への心配は残る。リサイクル？——人件費の高い日本では無理かもしれない。

「かしこい」人たちは、人手のやすい近隣アジア諸国への輸出を考える。日本では廃車のバスや廃船でも環境規制の甘いフィリピンといった国ぐにへ持って行けばいい。そこならまだまだ走れる。いよいよ解体となつても低コストでリサイクルされるから問題ない。産業廃棄物の国外移転は国際

条約で規制されていても、中古品やリサイクル資源ならだいじょうぶのはず…。

これは現実に行われていることだ。そしてその実態は厳しい。マニラでは出歩くたびに顔をぬぐうハンカチが大気汚染でべっとり黒ずむ。リサイクルは金目のものだけで、廃油やプラスチック類は投棄される。低コストは現場作業員の健康と住民の生活環境をそなつて実現される。明治期日本の足尾銅毒事件のような鉱害や目につきやすい産業公害への対策が精一杯のフィリピンで、環境ホルモンはまったく問題化していない。ごく微量の汚染を調べる測定機器もほとんどない。

そして皮肉にも、地元の河川や海の汚染は養殖エビなどの輸入食品とともに日本の消費者へともどってくる。もちろん地元の人びとへの害毒のしわ寄せのほうが格段にひどいことはいうまでもない。

「平和学の現在」とはいったい何か。それはポスト冷戦期の平和学、グローバル化と一体のグローバルな危機の時代の平和学にはかならない。

従来の観念や感覚を洗い直しつつ現実をまっすぐに理解し、今の世の中をどう変えていけばいいのかという課題に正面から取り組む学習・研究活動が平和学だ。暴力はそのキー概念となつている。暴力を克服し、社会の構造的な変革をめざす方向性を平和学は明確にもつ。

しかし平和学が展開されているおもしろな場合は、他の研究分野と同様に、大学・研究所など間違いなく体制内にある。学習者の多くもそこに集う。フルタイムで平和研究に取り組む者たちの相当部分は大学・研究所などになんらかの形で所属しており、研究をふくむ生活をそうして成り立たせている。大学も構造的暴力から自由ではない。ティーチャー（教師）多くは研究者でもある）とラーナー（学生・学習者）の関係も見直されるべきではないか（終章参照）。体制とは変革されるべき構造そのものなのだ。

これは平和研究者・学習者の自己矛盾だろうか。むしろそれは平和学に緊張が内在していることを意味すると積極的に考えたい。緊張をはらむがゆえにエクサイティングであり、緊張を意識してこそ平和学がいつそうおもしろくなるのだ。

西欧近代は科学技術の発達によって、「豊かな社会」＝資源大量消費型の生活様式を実現させた。ただし世界人口の二割にたいしてのみだ。同時にそれは、本書の各章で取り上げるように、核兵器をふくむ大量殺戮兵器を生み、地球環境の深刻な破壊をひきおこした。その被害は第三世界、そして未来世代により大きくおしつけられている。一国内なら格差是正にある程度は役立つはずの民主制度も、地域間・世代間ではほとんど機能していない。

たしかに戦後六〇年以上にわたって欧米や日本が直接戦場とされることはなかった。この事実を平和運動や平和学の成果と見ることもできる。だがそれは、むしろこれまでの取り組みの限界を示すものだろう。たんなる欧米日の「平和共存」が平和学の目的ではない。ことに戦場とされ、兵器と公害と廃棄物の輸出先とされてきた第三世界の人びとや未来世代の犠牲のうえにそれが成り立つものならば。

運動と研究。継承と変動。即時対応と構造変革。「平和学の現在」は定まったものではない。さまざまな葛藤とせめぎあいの最中にあるダイナミックな現状こそが、「平和学の現在」なのだ。

平和をつくりだす運動は平和学と両輪となって進む。

平和学の先端は大学や研究所ではなく、広範な平和活動の諸現場にある。たとえばイスラエル軍のガザ地区侵攻に耐えぬいて生活再建をはかるパレスチナ民衆の解放運動のなかに。たとえば世

界各地の元戦場で這いつくばって地雷をひとつひとつ取り除いている人たちの営みに。たとえば戦争や内戦における性暴力を告発する女性たちの困難なたたかいのなかに。

しかし先端だけでは平和活動の継続は困難で、平和学も成り立たない。国境を越えたアクションリサーチを含め、運動を支える幅広い市民の学習・調査・交流活動、研究者たちによる過去の資料発掘や現状分析・理論的整理などをベースに、多数の人びとの連携によって現状は変革されていく。暴力克服をめざし、自力更生を進めるために学習する市民。その学習実践が平和学であるとともに、そのための指針となり、拠り所となるべき研究が平和学だ。こうした成果が人びとに共有され、それぞれの生きかたに活かされること―それによって初めて、グローバルな危機の時代のなかで広がる無力感や諦めを乗り越え、世の中を深部から変えていく力となるにちがいない。

一九九九年、本書の原型にあたる『平和学の現在』が、それぞれ異なるテーマと現場に取り組み、平和学を共通項として出会った八名の研究者の、平和学の現在を描き出す共同作業として生み出された。平和学に関心をよせる人びとへの手引きであるとともに、冷戦時代に形成された従来の平和学を組み替えていく試みでもあった。

二〇〇五年にはその姉妹編、『平和学のアジェンダ』が出版された。9・11事件（二〇〇一年）を境に激化した「対テロ戦争」とその対極にあるNGOの非暴力的介入、日本国内の憲法改変への動きと逆に深まる東アジア地域共生へむけた平和憲法の再評価、軍事基地容認への沖縄の「平和のゆるぎ」、セクシャル・マイノリティーなど、まさに二一世紀初頭に浮上した典型的争点を取り上げ、平和学の議論を深めた。

そして当初より一〇年、『平和学の現在』の内容をアップデートした改訂版編集の検討にあたり、編者たちは現状にそくして大幅な刷新をはかる新版の刊行を決意した。

イスラーム研究という、平和を考えるとときいまや不可欠の分野をカバーし、また太平洋マーシャル諸島・北アイルランドという平和への難問を抱えてきた諸地域の研究者、計三名が新規に加わった。前回からの五名とともに、平和学の基本とグローバルな実態を伝え、暴力克服へ向けた考え方と取り組み方法を示すよう試みた。けっして網羅的に問題を取り上げたわけではないので、先述の『平和学のアジェンダ』も併せてお読みいただきたい。

平和は待っていればいつか運よく手に入るものではない。立場のちがう多様な人たちとともに暴力の縮減・克服に取り組むと、平和はその分だけ私たちに近づくはずだ。

二〇〇九年五月

サバティカル・イヤー（研究年期）における拠点のひとつ、杉並・松庵の寓居にて

共編著者 横山正樹